

# 大地の恵み （斉藤貞利）

一 対象学年 第一学年

二 主題名 理想の実現

三 ねらい

理想を持ち、目標の実現に向かって努力しようとする態度を育てる。

(1-4)

四 主な発問

- (一) 開墾に着手した貞利はどんなことを考えたでしょう。
- (二) 農民の不満の声を聞く貞利はどんな気持ちだったでしょう。
- (三) 開墾した土地に広がる水田を見た貞利はどんな気持ちだったでしょう。

五 指導上の工夫・留意点

明治時代の話であるので、当時の時代背景をpushさせておきたい。  
地域の発展を理想として、私財をなげうってでも実現しようとする姿をとらえたい。

六 参考資料等

(一) 略伝（斉藤貞利）

一八四三年 えびの市に生まれる。鹿児島医学校にて医学を学び、加久藤で開業する。地域の発展のために、農業を中心に産業の振興を図った。

(二) えびの市（岡元・加久藤）在任の方の話をもとに作成した。

(三) 貞利の投じた私財は、当時の医者年収（およそ千二百円）の四倍程度（加久藤町郷土史参考）であったと考えられる。

(四) 参考文献

「加久藤町郷土誌」加久藤町郷土史編纂委員会（一九六五年）  
「えびの市史資料集Ⅰ」えびの市（一九九一年）

# ほたるの里を守りたい

一 対象学年 第一学年

二 主題名 郷土の発展

三 ねらい

地域社会の一員としての自覚を持ち、奉仕活動等を通して、郷土の発展に尽くそうとする心情を育てる。(4-17)

(8)

四 主な発問

- (一) ホタルの保護に関する理解が得られなかった時、私はどんなことを考えたでしょう。
- (二) 私はどんな気持ちで陳情を続けたのでしょうか。
- (三) ほたるの里が認められた時、私はどんな気持ちだったのでしょうか。

五 指導上の工夫・留意点

ホタルの生態に関する資料を導入で紹介することで、生徒の関心を高めたい。

ホタルの保護が環境保全だけでなく、地域の発展につながることを意識した活動であった点を押さえていきたい。

県内には、ホタルの保護活動を行っている地域が他にもあるこ

とに留意したい。

六 参考資料等

- (一) 小林ほたるの会会長の話をもとに作成した。
- (二) 出の山公園は、小林市の申請によって、環境庁の「全国ふるさといきものの里」の認定を受けた。
- (三) ホタルの一生

ホタルの幼虫は小川の水の中で棲息する。  
幼虫期はカワニナ(巻き貝)を捕食する。  
四月下旬の湿度の高い日に川から上がり、土にもぐってさなぎになる。

さなぎは一ヶ月で成虫となる。

成虫の生存期間は十日前後と言われる。

(四) 参考文献

本文において、蛍については「ホタル」とカタカナ表記とした。  
ただし、固有名詞(「ほたるの会」「ほたるの里」「ほたる祭り」)についてはひらがな表記とした。

# 城山の鐘の音

一 対象学年 第一学年

二 主題名 郷土の伝統

三 ねらい

自分たちの郷土の伝統を見つめ直し、継承していこうとする態度を育てる。(4-~~8~~)  
(9)

四 主な発問

- (一) 戦争中、延岡の人々はどんな気持ちで「城山の鐘」を守ろうと活動したのでしょうか。
- (二) 代々の鐘守は、どんな気持ちで鐘を撞き、城山で暮らしていたのでしょうか。
- (三) 延岡の人々は、「城山の鐘」にどんな思いをもっているのでしょうか。

五 指導上の工夫・留意点

現在の六代目鐘守は、延岡市の公募により引き継がれた。六代目が決まるまでには、一度目の公募では応募する人がなく、条件を改善して二度目の公募を行ったという経緯がある。また、鐘守が決まらなければ地元の婦人会が交替で鐘を撞くという申し出も

あった。このエピソードを語ることで、今の延岡の人々の「城山の鐘」への思いを深く考えさせたい。

六 参考資料等

(一) 補足説明・出典

初代の鐘には「日州延岡城主有馬左衛門佐」と銘文陰刻があり、「延岡」という地名に関する最古の金文石といわれている。

稲田ハナさんの話をもとに編集委員会で作成した。

(二) 参考文献

「城山の鐘と私と思い出と」稲田ハナ著（平成四年）

「城山とその鐘」延岡市文化連盟編（昭和三十一年）

「あの日あのととき鐘とともに一一七年」夕刊デイリー新聞社（平成八年）

「城山の鐘想い出はつきず」稲田ハナ著 宮崎日日新聞社（平成九年）

# 御崎馬のいななき

一 対象学年 第一学年

二 主題名 生命の尊重

三 ねらい

他の生物の生命の尊厳に気づかせ、それらと調和して生きていく  
うとする態度を育てる。(3-12)

(1)

四 主な発問

(一) 生まれたばかりの子馬を見た私は、どんな気持ちだったでしょう。  
う。

(二) おじさんの話を聞きながら「どきつとした」私は、どんなことを  
考えたでしょう。

(三) おじさんの最後の言葉は、私の心にどのように響いたでしょう。

五 指導上の工夫・留意点

・ 国の天然記念物に指定されている都井岬の野生馬についての文  
章である。子馬の誕生や、母馬と子馬とのきずなから、人間以外  
の生命の尊厳について考えさせたい。また、観光地でもある都井  
岬で人間が何気なく行っていることが、馬の生命を損なう原因に  
なっている現実気づかせ、自然とともに生きるという視点から、

六 参考資料等

身近な問題として受け止めさせたい。  
・ 都井岬のパンフレットを用意したり、御崎馬の生態を調べたり  
しておくとうい。

(一) 補足説明・出典

御崎牧場は元禄十年、高鍋・秋月藩によって開設された。明治  
七年、御崎組合に払い下げられ、昭和二十八年に「岬馬およびそ  
の繁殖地」として国の天然記念物に指定された。

現在、牧組合では馬の寄生虫駆除、馬籍簿作り、危険箇所への  
柵の設置、健康状態の調査などの活動を行っている。

都井岬馬保護対策協力会員の話をもとに編集委員会で作成した。

(二) 参考文献

「御崎馬」黒木正雄著 九州大学出版協会（一九八三年）

「都井の野生馬」宮本茂・窪田昌三・三又喬 共著

九州観光新聞（一九七五年）

# 磯貝 一 くわが道を歩み続けてく

一 対象学年 第二学年

二 主題名 希望の前進

三 ねらい

困難や失敗にくじけず、希望と勇気を持って着実にやり抜こうとする強い意志を養う。(1) (2)

四 主な発問

- (一) 海軍兵学校への夢が破れてしまった時、磯貝はどんな気持ちだったでしょう。
- (二) 嘉納先生に投げられた磯貝は、どんなことを考えたでしょう。
- (三) 激痛をこらえながらも磯貝は、どんな気持ちで京都に向かったのでしょうか。

五 指導上の工夫・留意点

柔道界の最高峰に立った「磯貝 一」にも、若いころ傲慢な一面があったことに気づかせる。そして、挫折をして初めて謙虚さや慎み深さが自己の向上のために重要なことであると気づいた主人公の心の成長について考えさせたい。

失敗や困難に負けず、周囲の状況や自己の能力を踏まえながら、

自分の目標や夢のために、ねばり強くやり抜いていこうとする主人公の姿に共感させて、最後まで着実にやりぬく強い意志とは、ものごとを正しく判断し、目標を実現するための諸条件を検討しながら、合理的な計画性や見通しをもって実行することが大切であるということを考えさせ、ねらいへと迫りたい。

六 参考資料等

(一) 略伝及び補足説明

一八七一年(明治四)～一九四七年(昭和二十二)、宮崎県延岡市に生まれる。幼い頃から柔術を通して、父に厳しく育てられる。嘉納治五郎の「講道館」に入門し、嘉納を終生師と仰ぎ、自己鍛錬をしながら講道館柔道の普及に努め、生前に十段という最高段位についた最初の人物。

柔術は武術であり、柔術を改良した近代的なスポーツを柔道という。完成者が嘉納治五郎である。

水垢離(みずごり)は、冷水を何度もかぶりながら、自分の精神修養や願かけなどに行っていたもの。

(二) 参考文献

「郷土の人物」宮崎県教育委員会発行 昭和五十七年  
「柔道十段 磯貝一の生涯」 磯貝一著彰会 昭和五十九年

# 巨樹にふれて ーある樹木医の体験からー

一 対象学年 第二学年

二 主題名 自然への畏敬

三 ねらい

自然のもつ気高さや神秘性に気づき、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深めようとする豊かな心情を育てる。(31付)

四 主な発問

(一) 細田地区の人たちが「センダンを守る会」を結成したのはどのような気持ちからでしょうか。

(二) 復活したセンダンの木を「センダンを守る会」の人たちはどんな気持ちで見ただでしょうか。

(三) 巨樹に出会ったとき「たちすくんでしまいました」とありますが、そのとき「わたし」はどんなことを考えたでしょうか。

(四) 「自然の不思議さ、すばらしさ」を感じたできごとをみんなで話し合ってみましょう。

五 指導上の工夫・留意点

自分たちの身近なところにも巨樹や古木があることをおさえて、人間が生活の中で、自然とかかわりながら生きていることにも気

づかせたい。

植物の生命力の不思議さに気づかせるとともに、生あるものすべてを尊重する態度を身につけさせたい。

六 参考資料等

(一) 「巨樹」とは地上から一、二メートルの幹回りがおおむね三メートル以上で、推定樹齢百年以上の樹木をさす。

(二) 樹木医(じゆもくい)とは農林水産省から認められ登録された公的な資格で、現在(平成九年七月)、県内では八名の樹木医が活動している。

(三) 出典

社団法人宮崎県緑化推進機構の事務局長の話をもとに編集委員会で作成したものである。

(四) 参考文献

・「宮崎の巨樹 一〇〇選」 宮崎県発行(平成四年)  
・「巨樹紀行 最高の瞬間に出会う」 芦田裕文(平成九年)  
・「随想 森林」 土井林学振興学会発行(平成九年)

# 山之口麓人形浄瑠璃に取り組んで

一 対象学年 第二学年

二 主題名 伝え、受け継ぐこと

三 ねらい

代々伝えられているものを受け継ぐことを通して、地域社会の一員としての自覚をもち、先人に対する尊敬と感謝の気持ちを深め、郷土の発展に尽くすようにする。(4-~~7~~)

(9)

四 主な発問

(一) はじめての公演が終わったとき、筆者はどんな気持ちだったでしょうか。

(二) 「そう考えると、今、自分がやっていることが不思議に思えました。」とありますが、どうして筆者はそのような気持ちになったのでしょうか。

(三) 「君も保存会に入らんね。」と誘われた時、筆者は何と答えたのでしょうか。理由も考えてみましょう。

(四) あなたの住む町で、代々伝えられているものを受け継ぐことを通して社会に尽くし、自分の人生を大切に生きてきた人はいませんか

五 指導上の工夫・留意点

本資料は、保存会員の父親の影響で人形浄瑠璃の世界に入った実在の中学生を語り手にして、作文形式でまとめた。

古くから現在まで伝わっている背景には、多くの人々の努力と偶然があることに気づかせ、伝統的文化を伝え、守っていくことの意義を理解させたい。

伝統的文化を伝えていくことの大切さや素晴らしさはわかっているが、実際には大変な苦労があるということから葛藤に共感させ、それでも保存会の一員になったであろうと予想される筆者の心情を探らせていくことで、ねらいに迫りたい。

六 参考資料等

(一) 補足説明

左手で胴串と人形の左手をはさみ、右手で人形の右手を操作する。そのため、自由に動かせるのは右手だけである。江戸時代に使われた人形は、「間狂言あいきょうげん」に使われたものを除いて、人形遣いが亡くなると一緒に埋葬したために現存しているものはない。

(二) 参考文献

聞き取り調査 山之口麓文弥節人形浄瑠璃保存会々員の方々  
(中学生二人を含む)

山之口麓文弥節人形浄瑠璃資料館

「山之口麓文弥節人形浄瑠璃の歩み」保存会編

# 栗田彰子先生

一 対象学年 第二学年

二 主題名 人の立場で考える

三 ねらい

温かい人間愛の精神を深め、思いやりの心を持って人に接することができるようにする。(2-1)(2)

四 主な発問

(一) 日本語の教師になるためにカナダに帰ることができなくなったとき、栗田先生はどのような気持ちで安賀多国民学校の仕事を続けていたのでしょうか。

(二) 「墨汁を半紙に落としたら決して消えないでしょう。」と話されたときの栗田先生は、どんな気持ちだったのでしょうか。

(三) 没後五十年以上たった現在も、多くの人たちが栗田先生を慕って慰霊式を続けているのはなぜでしょうか。

五 指導上の工夫・留意点

常に人の立場を尊重しながら、親切にし、いたわり、励ましてきた栗田彰子先生の生き方に焦点を当てて指導する。

いつも笑顔を絶やさなかった栗田先生の優しさの背景には、自

分の苦しみや迷いのために周りの人に余計な心配をかけまいとする厳しさと、人を救うことも傷つけることもできる「言葉」を大切にしなければいけないという信念があった。そのことを、「墨汁を半紙に落としたら決して消えないでしょう。」という言葉の中から気づかせたい。

また、栗田先生に励まされた多くの人たちが、戦後五十年たっても、感謝の気持ちを忘れずに集まってくることにふれ、人から受けた親切に感謝することや人と人とのつながりの大切さについても、目を向けさせたい。

六 参考資料等

(一) 補足説明

栗田彰子先生は、大正八年十月にカナダのバンクーバーに生まれる。父親の松二さんは、バンクーバーの新聞社勤務。母親のハツ子さんは、延岡市の出身である。

当時の塩月儀一校長先生は、栗田彰子先生顕彰会の代表を務めた。

(二) 参考資料等

聞き取り調査 栗田先生の元同僚および教え子の方々

「愛は一切のものを達成する」夕刊デイリー新聞社連載(平成七、八年)

「愛は一切のものを達成する」渡木真之・秋山栄雄編(平成九年)



# わが胸の炎

富松良夫

一 対象学年 第三学年

二 主題名 文学を愛して

三 ねらい

より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもとうとする心情を育てる。(1—2)

四 主な発問

(一) せき髄の病気で小学校に行けないかもしれないと考えた時の、良夫の気持ちはどうだったでしょうか。

(二) まだまだ文学の勉強がしたいのに、上の学校へ進むことができなかつた時、良夫は、どのような気持ちだったでしょうか。

(三) 幾多の困難にもかかわらず、どうして文学に対して熱意を持ち続けることができたのでしょうか。

五 指導上の工夫・留意点

富松良夫は、小さい頃に病気にかかり体が不自由であり、さらに、母や妹の死という様々な困難にもかかわらず、それを跳ね返すかのように文学に専念し、すばらしい作品を残していった。そこには、良夫の文学に対する情熱やなにことにも最後まであきら

六 参考資料等

(一) 略伝

・明治三十六年 都城市姫城町で生まれる。

・大正六年 都城尋常高等小学校卒業。

・大正十一年 文芸同人誌「盆地」に初参加。

・昭和二十六年 放送劇「椎葉物語」がNHKから全国放送。

・昭和二十九年 都城市歌を作詞。同年病気により死去。

(二) 参考文献

「黙示」

富松良夫の詩とエッセイ集

「詩人 富松良夫」

富松昇 著

めずにやりとげた良夫の強さがあつたことに気づかせたい。

当時、外国語を学ぶことさえままならない状況であつたにもかかわらず、フランス語を一人で勉強しフランス文学にまで接していく良夫の熱意に気づかせたい。

小さい頃からの孤独な生活が、同人誌「盆地」の発刊を機会に、様々な人々と出会い、友人をつくることができた。その時の良夫の喜びと自分の人生を変えていくまでの苦労や努力について考えさせたい。

# 十次の答 石井十次

一 対象学年 第三学年

二 主題名 人間愛

三 ねらい

十次の崇高な人間愛にもとづく行動に気づかせ、温かい人間愛の精神の尊さを理解し、これを日常生活に生かしていく心情を育てる。

(2-1)(2)

四 主な発問

- (一) 初めて見ず知らずの子を引き受けることになったときの十次の気持ちは、どうだったでしょうか。
- (二) 一年半もの長い間、十次はどんな思いで悩み続けていたのでしょうか。
- (三) 悲しみにくれる妻を、十次はどんな思いで見つめていたのでしょうか。

五 指導上の工夫・留意点

岡山・宮崎などに孤児院を開き、のべ三千人の恵まれない児童を救済した日本の社会福祉事業の先駆者、石井十次。この読み物資料は、十次が、医者になるか児童救済に専念するかで悩みに悩み、ついに医学書を焼いて児童救済に身を捧げる決心をする逸話をもとに作ったものである。

六 参考資料等

十次の恩師・萩原百々平は高鍋の出身で宮崎病院の院長をしていた。十次を診察する機会があったとき、十次が立派な人物であることを見抜き、医者になることを勧めた。学費もわずかだが援助していた。

十次が創った児童教育施設は、「孤児教育会」（後に「岡山孤児院」と名づけられ、趣旨に賛同した人たちは、毎月十銭の会費を納めた。

(一) 略伝（その後の十次）

十次の設立した「岡山孤児院」の活動は、支援者を得ながら広がり、孤児や天災にあつた子どもたちを全国からひきとり、多いときには千二百人に達した。施設を少しずつ宮崎県の茶臼原に移していこうと考え、明治二十七年に先発隊を送り、明治四十三年には施設を残らず茶臼原に移した。子どもたちとともに開拓を行いながら、その教育に努め、人々に惜しまれながら、大正三年、四十九歳でその生涯を終える。

(二) 参考文献

- 「郷土の人物」宮崎県教育委員会発行（昭和五十七年）
- 「石井十次小伝」財団法人石井十次顕彰会発行
- 「石井十次日誌（明治二十一年～二十二年）」石井記念友愛社発行
- 「愛の心を今に」宮崎日日新聞社発行（平成六年）

# アカウミガメと子どもたち

一 対象学年 第三学年

二 主題名 自然愛

三 ねらい

かけがえのない自然を守ることの大切さを知り、動植物を保護していこうとする心情を育てる。(3) (中)

(2)

四 主な発問

- (一) 何度も頭を下げて頼んでいた子どもたちの様子を見て、隆志は、どんな気持ちだったでしょう。
- (二) 藤田さんの注意をうわのそらで聞いていた数日前の自分を思い出していた隆志は、どんなことを考えていたでしょう。
- (三) 「隆志には、この子たちが、たまらなくなたまらなく可愛く見えた。」とありますが、「可愛く見えた」というのは、どういうことなのでしょう。

五 指導上の工夫・留意点

宮崎県の天然記念物に指定されているアカウミガメを素材とした話である。砂浜での花火や車の乗り回しが、どれほどアカウミガメやコアジサシなどの脅威になっているのかを考えてもいなかった主人公が、自然環境調査員と彼に協力する子どもたちの姿を

六 参考資料等

(一) 補足説明

見て、今までの自分をふり返る。主人公の心情を追うことよつて、自然を守り動植物を大切にしていこうとする気持ちを育てたい。

アカウミガメの赤ちゃんの写真やアカウミガメのことを紹介した新聞の切り抜きなどを集めておくとよい。

本文は、日向市お倉ヶ浜のアカウミガメ調査監視員から聞いた話をもとに作成したものである。子どもたちと四輪駆動車との話や調査員が語るアカウミガメの話は、ほとんどが実際の話である。

アカウミガメはカメ目、ウミガメ科である。甲長一メートル、体重百五十キログラム。日本近海に生息するウミガメは現在五種で、そのうち日本本土で産卵するのがこのアカウミガメである。太平洋とインド洋の熱帯および亜熱帯の海に多く生息している。暖流に乗って回避し、日本近海に北上、毎年五月初め頃から八月頃までに砂浜に上陸し産卵する。一回の産卵数は、およそ百〜百五十個で、二〜三回行われる。

(二) 参考文献

「ウミガメ」 石井正敏著 平凡社発行  
宮崎日日新聞（平成九年八月一日付）地域発信「子供の悲鳴届け」  
濱田昌三

# 若山牧水

一 対象学年 第三学年

二 主題名 家族愛

三 ねらい

父母への感謝と敬愛の念を深め、思いやりを持つて接することができるような心情を育てる。(4—5)

(6)

四 主な発問

(一) 「牧水」という号に母の名前をつかったのは、どういう気持ちからだろうか。

(二) 「釣り暮らし……」の歌の叱られながらも母に船を渡した時の牧水はどんな気持ちだったのだろうか。

(三) 「坪谷のマキはあちゃんを迎えに行つてこい。」と言つた時、牧水はどんな気持ちだったのだろうか。

五 指導上の工夫・留意点

牧水は「愛郷の歌人」とも呼ばれ、どこにあつても彼の心には故郷の山河があり、母への思慕があつたことを押さえない。

本文中に掲げた短歌については、詳しい説明は避けて、歌のリズムを味わうことで、牧水の母への思い、自然への思いを感じ取

らせない。

家族とのふれあいについての事前の調査等を導入で扱うと効果的である。

静岡・宮崎間の距離的なことにふれることで、牧水の思いを押し込めたい。

六 参考資料等

(一) 略伝

一八八五年(明治十八)～一九二八年(昭和三年)

宮崎県東臼杵郡東郷町坪谷に生まれる。

歌人。旅を愛し、自然への深い愛着を歌つた作品が、多くの人々に愛唱された。歌集に「海の声」「独り歌へる」「路上」などがある。

(二) 参考文献

「牧水の生涯」牧水生誕百年記念実行委員会編(一九八五年)

伊藤一彦著「若き牧水」(一九八九年)

国文学・解釈と鑑賞「若山牧水の世界」